

第3回(仮称)苫小牧市民ホールWG会議

【展示・窓口WG】議事要旨

日時：平成28年9月16日(金) 13:30～15:15

場所：本庁舎2階 21会議室

出席：委員3名、事務局3名、北大3名

議題 リピーターや日常的利用を促すアイデア・事例について

■ 前回のまとめと今回の議題

- ・ 前回は、情報発信や機能連携について議論した。主な意見として、窓口機能は様々な情報を結び付けたり統合したりすることが大切であること、多様な活動を展開する個人を結びつけるための仕組みづくりが必要であることが挙げられた。具体的なアイデアについては、次回配布するシートを用いて検討していきたい。
- ・ 今回は、施設を日常的に利用してもらい、またはリピーターになってもらうためのアイデア・事例について議論したい。

■ リピーターに関すること

読書以外の活動が展開できる図書スペース

- ・ 配布資料中の「まちライブラリー(大阪府立大学)」は、市民が本を持ち寄る施設であり、図書を介して人とつながる場所づくりが目指されている。例えば、テーマが夏の場合、夏に関する本を展示したり、集まった本について語り合うイベントを開催したりしている。前回話題に挙がった、個人のコレクションを展示するアイデアにつながる。
- ・ 配布資料中の茅野市民館はホールと美術館の複合施設であり、図書館の分室が設置されている。ホールでの公演や美術館での展示テーマに合わせた本が展示してあり、ちょっとしたときに気軽に利用できる。
- ・ 苫小牧では、図書館自体は民営化されている。ミニ図書館のような施設は、コミュニティセンター内の図書室として存在している。
- ・ 図書館は指定管理者が運営しているため、新たな施設に図書館ネットワークの一部(分室)として図書施設を設置することは様々な調整が必要でありハードルが高いが、施設が独自に管理する図書コーナーとして設置することは可能だろう。
- ・ 「まちライブラリー」のように市民が自由に持ち寄るシステムの方が可能性はあるかもしれない。
- ・ 図書館という機能でなくとも、書店が施設のテナントとして入っているケースも考え

られるだろう。

- ・ 購入前の本を併設されているカフェに持ち込んで読める書店は増えている。
- ・ コトマには、指定管理者が設置した図書コーナー（銀行の待合室のような規模）があり、雑誌や新聞が読める。
- ・ 図書は、様々な活動と連携しやすいコンテンツだと考えている。音楽 CD や映画 DVD でもよいが、日常的に利用する際にふと手に取れるものを考えたい。
- ・ 図書館で特集した本の演劇を企画したり、生演奏を聴きながら本を読んだりしてはどうか。市内の演劇グループや佐々木さんのようなゴスペルの活動をされている方との連携も期待できる。
- ・ 普段、図書館は静かにする場所だが、時々ルールを変更して演劇の舞台やライブ活動の場になってもよい。
- ・ 数年前に、主婦中心のゴスペルグループが千歳のイトーヨーカドー（現ちとせモール）でクリスマスライブを行い、妻が参加した。
- ・ 例年、市民ホールで道警のカラーガード隊と市内の吹奏楽部がコラボレーションしてコンサートを開催しているが、今年は Softly（苦小牧の弾き語りユニット）が参加している。今後も様々な展開が考えられる。
- ・ 独自の図書スペースとした場合、既存の図書館の形式を踏襲する必要がないので、やりたいことに合わせた新たな空間を考えられるかもしれない。

将来の興味・活動の発展につながるものづくりワークショップ

- ・ 子どもが幼少期からエスカレーター式に施設に通ってもらうことを考えたい。苦小牧では、まだ音楽を聴いたり芸術を見たりする文化が浸透していないように感じる。小さな頃からワークショップなどをおして演劇や美術鑑賞に興味を持ってもらえるような環境をつくりたい。
- ・ 可児市のアウトリーチ活動では、子どもたちにイルミネーションを作ってもらい、それをコンサート会場に持ち込んで楽しんでいる。例えば、これからハロウィンに向けてカボチャのランタンづくりをする際に、それを演奏会に持って行って演出をすることが考えられる。子どもが作ったものが会場に展示されて、なおかつそれを背景に演劇や演奏があると、普段は訪れないような人まで呼び込めるのではないか。樽前アーティのような苦小牧で積極的にアート活動をしている団体とコラボレーションして、子どもたちの工作とダンスを組み合わせるなど、様々な展開が考えられる。そのような活動を小さな頃から続けることで、10年後につながり、定着していくように思う。
- ・ 例えば、クリスマスのイベントであれば、ホール以外の場所でも子どもたちの装飾を背景にゴスペルを歌うこともできるのではないか。
- ・ ゴスペルは、ある程度のスペースがあればどこでもできる。サークルのメンバーは非常に積極的なので色々な場所で活動していきたいと言っている。

- ・ 配布資料中の「市民によるロビーの装飾活動（茅野市民館）」の事例では、市民の活動を、舞台や美術などの専門的な知識を持つサポート団体が支えている。そのため、市民は自由に企画ができ、行動に移しやすい。新たな施設における具体的な体制・組織づくりについては今後議論するが、子どものものづくりと演劇・演奏などの組合せは比較的ハードルが低いので、是非実現に向けて取り組んでいきたい。
- ・ 以前、苫小牧市民文化交流センターにおいて、市民ボランティアメンバーによる企画講座の中でカラーセミナーの講師を依頼され、講座を担当した。ボランティアメンバーによって様々なアイデアが出されるので、企画発案のしくみとして非常に効果的である。
- ・ 配布資料中の「専門機器のトレーニング講座・勉強会（札幌ものづくりオフィス）」は、高度なものづくりワークショップの事例である。専門スタッフの下で特殊な機材を体験できることも体験型展示につながる。
- ・ 技能士さんによる市民向け講座は不定期イベントとして開催されている。また、年1回開かれる技能祭は人気がある。
- ・ 廃油を用いた石鹸や、牛乳パックを用いたハガキづくり等はリサイクルプラザで体験できるが、施設が遠いことが難点だろう。
- ・ 科学センターでは、トヨタがソーラーカーの模型キットを無償提供してものづくり教室を行っている。

施設内外で活用できるポイントシステム

- ・ 東京のある図書館では、借りた本を銀行の通帳のようなかたちで記録できると聞いた。通帳に記録が貯まっていくことがうれしく、子どもたちが親を連れて積極的に通っているようだ。
- ・ 佐藤さんが挙げられた図書館の通帳システムは色々な応用が考えられる。大人でも、ラジオ体操のようにポイントが記録されていくことで楽しめる。例えば、デパートの友の会のような仕組みがあるが、もっとハードルの低い仕組みを考えたい。
- ・ 苫小牧で行っているとまチョップポイントは、加盟店で買い物・飲食をするとポイントが蓄積されるシステムである。公共施設や人間ドックの利用も対象となる。
- ・ ポイントの仕組みに関して、新しい施設内で完結するものだけでなく、地域全体に関わるものも考えられる。
- ・ 九州の友人は、銀行の跡地を利用して町内の色々な情報が集まる拠点をつくり、情報銀行と名付けている。銀行と同様、市民が情報をストックしたり引き出したりできる仕組みである。窓口機能やリピーターにつながるアイデアとして参考にできる。

コキアを育ててハウキをつくる体験型学習

- ・ コキア（別名・ハウキ草）を用いてリピーターを創出する提案。幼児から高齢者まで

を対象としている。体験型学習の内容は、施設の敷地内で苗からコキアを育て、紅葉後は刈り取ってホウキをつくるというもの。植物の生育観察から始まり、工作・展示につながる。全体で半年程度を要するため、長期間日常的に施設に通うことになる。施設に自分のコキアがあれば、様子が気になり自然と通う頻度は増える。それによって施設が賑わい、話題性も生まれる。コキアは地面に植え付けず、鉢で育てることを想定しているため、鉢を移動することで広場の柔軟な活用に対応できる他、鉢の配置形状を工夫することで楽しい居場所・居心地の創出につながる。例えば、樽前山や北海道の形状に並べると施設の風物になる。さらに、成果品を持ち帰ることで施設に対して親近感が湧き、私たちの市民ホールとして愛着が持てる。

- ・あまりお金がかからず、1,000円以内で参加できる企画が望ましい。例えば、幼稚園や老人会から参加者を募るなど、多くの市民が参加できるような企画を考えたい。
- ・コキアは元々温暖な地域の植物だが、富良野や美瑛、苫小牧でも十分大きく育っている。種から苗を育てる際は、専門知識を持つサンガーデンのスタッフとの連携できるとよい。
- ・現状、北海道ではコキアを主役にした企画は見当たらないが、苫小牧とコキアを結び付ける理由は改めて考える必要がある。

本物を体験できるバックヤードツアー

- ・配布資料中の「バックヤードツアー」は、成果物を展示するのではなく、舞台の裏方や準備のプロセスそのものを展示として提供するというアイデアである。前回話題に挙げた動的または体験型の展示にも関連する。実現可能性が高く、市民に施設を身近に感じてもらえるきっかけとなるので、是非取り入れたい。
- ・バックヤードツアーは、市民会館で既に行われている。バックヤードツアーの他にも本物を体験できる企画として、1時間3,000円で大ホールにあるスタインウェイのピアノを体験できる。
- ・市民会館のバックヤードツアーに参加したことがあるが、専門スタッフの下で本物の機材に触れることができ大変面白かった。10数名の市民が参加していたが、小さい子どもがはしゃいでいたことから、かなり好評であったと思われる。
- ・基本構想の議論の際にキッズニアが話題に挙げたが、新たな施設の中に唐突に職業体験の場を挿入するのではなく、あくまでも施設の機能と関連したかたちで仕事体験ができるとよい。

■ 日常的利用に関すること

多様な過ごし方を選択できるカフェ空間

- ・女子会ができるようなお洒落なカフェや、スターバックスコーヒーのような気軽に利用できるカフェが欲しい。苫小牧のスタバはイオンにしかなく常に混雑しているが、

分散して様々な場所にあると落ち着いて利用できる。

- 猫カフェのような、動物が店内にいる・連れて行ける店は苦小牧になく、あれば面白い。
- 例えば、施設内の本を館内のカフェに持ち込んで読めて、出口の回収ボックスに入れて帰れるシステムであれば日常的に利用しやすい。
- 苦小牧にはゆっくりできる場所があまりない。みんなでおしゃべりできるスペースも欲しいが、個人ブースのような仕切りがある場所もあるとよい。
- 子どもが遊べる施設が足りないということは仕事上耳にすることが多い。施設に遊具や芝があると親子連れが日常的に来やすいのではないか。
- 新しい施設が日常的に利用されるには、交通アクセスをよくすることが大切。市内各地から通じるバス等の整備が必要。
- 無料 Wi-Fi や充電スペースが充実していると、気軽に訪れやすい。
- 配布資料中の「Café Fermata (武蔵野プレイス)」は、図書館内に設置されており施設に入っただけですぐ見える場所にある。図書館にカフェがテナントとして入っている施設としては葛屋図書館が有名だが、この事例ではカフェの運営者をプロポーザルで決定している。図書館内でアルコールも提供するなど、公共施設らしからぬ運営をすることが条件となっているが、熱意のある運営者を呼び込む手法として特徴的である。このように、積極的にイベントを仕掛けていくタイプのカフェも考えられる。
- スタバは収益力があり、施設にとっては都合が良い。一方で、お金の無い中学生にとっては敷居が高く、お金をかけずにゆっくりできる空間も考えていきたい。
- 例えば、札幌のアスティはオフィスビルであり、地下のスペースにテーブルとイスが置いてあり自由に利用できる。日中はコンビニでおやつを買った中学生で大変賑わっており、研究室の学生のノマドワーカーに関する調査では、アスティの利用率が非常に高いという結果が出た。アスティは民間のビルだが、コーヒーを頼まなくても居られる公的なスペースを提供している点は、公共施設を計画する上で参考にできる。
- スタバのようなカフェと、寝転がれる大きなソファがあるフリースペースが隣接していて、どちらも利用できるとよい。
- 新千歳空港のフードコートは、専用の空間をもつ店舗とは別に、自由に利用できて子どもが遊べる空間もある。窓からは飛行機の離発着が見えるため、居るだけで楽しめる。新たな施設では、窓から何を見るか検討する必要があるが、店舗空間とフリースペースが同居するかたちは参考にできる。例えば、中高生はコンビニで安く済ませてフリースペースで過ごし、より落ち着きたい人はカフェに行くという選択ができる。
- お金を払ってゆっくり過ごしたい人、お金をかけずに気軽に過ごしたい人、子供と遊びたい人などが同時に利用できるとよい。
- 公共施設は外部に座るスペースが少ないが、気軽に座れる工夫が欲しい。ただし、イスやベンチなどではなく、さりげない工作物で対応するのが望ましい。例えば、大阪

の住吉区民センターでは外部に親水空間があり、段差に座れる設えになっている。同施設では随所に座って談笑するカップルの姿が見られたことから、気軽に休める居場所づくりの重要性を強く感じた。

ペットと共に通える施設

- ・ ペットを連れて行ける公共施設はあまり見かけないが、ニーズはありそうである。
- ・ 緑ヶ丘公園や文化公園では、休日に芝生の上で犬の散歩をしている人が多い。
- ・ 北海道の友人は、犬を連れてキャンプに行くなど、ペットとアウトドア活動を楽しんでいる。施設全体をペット可とするのは難しいが、屋外であればペットと過ごす空間を提案することは可能。
- ・ 新千歳空港の隣に、ドッグランを併設した駐車場がある。自分を含めた犬を飼っている人は一定数いるので、犬と一緒に楽しめる施設（喫茶店など）はニーズがある。
- ・ 千歳アウトレットモール・レラの通路部分はペット可のため、ペット連れをよく見かける。ドッグランやペット用のショップもあり、賑わっている。
- ・ 例えば、パリではデパートの店内もペット可であり、社会全体がペットを許容している。一方、日本ではクレームが多く、モエレ沼公園は当初は全面ペット可だったが、後に芝生はペット不可になった。新たな施設では、全面ペット可とすることはハードルが高いが、施設の一部であれば十分考えられる。
- ・ 動物が苦手な人や、動物アレルギーの人に対しても考慮する必要がある。
- ・ 全館は難しいが、例えば中庭だけペット可とすることが現実的であろう。
- ・ 犬を飼っている人は必ず散歩に出かけるので、日常的利用の面ではペットを許容することは効果が高いと考えられる。
- ・ 札幌を歩いているとペット連れは多く見かけるが、苫小牧の中心部はほぼ見かけない。キラキラ公園でも子連れは多いがペット連れはいない。一方、自宅のあるウトナイは草むらが多く、日常的にペット連れを見かける。
- ・ 例えば、ニューヨークのセントラルパークでは、当たり前のように犬とフリスビーで遊んでいる光景が見られる。迷惑そうな顔をしている人はいない。
- ・ 日本はまだペットの文化が成熟していない、または社会的に慣れていないのかもしれない。

日常的に人が集まる展示空間

- ・ 個人コレクションを展示する際、ガラスで仕切ることでセキュリティを確保できるのではないかと。例えば、札幌の地下街（500m美術館など）でも同様の手法で展示を行っている。
- ・ 豊川コミセンでインテリアコーディネート講座の講師をしていた際、最終成果物の展示会を旧サンプラザ（苫小牧駅前プラザ egao）で行った。展示作品をより多くの人に

見てもらうことを考え、公共施設ではなく駅前の商業施設にスペースを借りるという選択をした。市民講座の成果物展示は毎年各地域のコミセンで行われるが、人が多く集まる場所で合同の展示会・発表会を開催することを提案したい。

- ・ アルテピアッツァ美唄や旧丸井今井デパート苫小牧店で写真展を開催した際、釘やピンを壁に打ち込むことができた。かしこまらないスタイルの展示ができるので、自ずと展示作品の幅も広がる。例えば幼稚園児でも画鋸を使って気軽に展示できる。
- ・ 展示する側が、展示空間そのものを創るという意識が持てる設えが望ましい。
- ・ 展示会場として、現状では公共施設よりも商業施設を利用した方が来場者数が多く見込めるといふ点は新たな施設を計画する上でしっかり考慮していく必要がある。新たな施設が展示会場として活用されるためには、日頃から多くの人を訪れる場所であると市民に認識してもらわなくてはならない。
- ・ 新たな施設の建設予定地は未定とのことだが、人の集まりやすさを考えると、やはり建つ場所は非常に重要であると感じる。
- ・ 展示は何もない場所では成り立たない。展示だけの空間ではなく、日常的に利用されている空間に盛り込んでいくことが重要。例えば、日頃からコキアを見に来る人で賑わっている中で展示を行うなどが考えられる。

■ 質問・要望等

- ・ 道新の生活情報誌「とまこむ」は、食やファッションなど女性受けがする記事が多い。創刊 20 年の雑誌であり、これまでに膨大な情報が掲載されているため、多方面で活躍する人を発掘するのに大いに利用できるのではないかと。居住地域が異なる 5 人の主婦が中心となって編集が行われており、長い人で 7 年目になる。編集担当者のネットワークは相当なものと考えられ、是非巻き込んでいきたい。
- ・ 次回の WG にゲストスピーカーとして招待し、冒頭 20～30 分程度、次回の議題のひとつである情報発信に絡めたかたちでお話ししていただくことを検討したい。

■ 次回の WG 会議に向けて

- ・ ○○がしたいので□□のような空間が必要ということは今後も継続して考えていきたい。すぐに実現可能な具体的なアイデアも、今は難しいが将来実現させたいアイデアもどちらも必要なので、積極的に出していきたい。次々回（第 5 回）の時点で、おおよそのアイデアが出揃っているイメージで議論を進めていきたい。
- ・ 次回は、情報発信・雰囲気づくり・居心地・居場所について議論したい。まちづくり・機能連携は全体をとおした話になるため、次々回以降の議題としたい。
- ・ 10 月 23 日（日）の市民フォーラムは、市民と共に新しい公共施設を考えるきっかけの場となるので、是非参加をお願いしたい。

■ 今後のスケジュール

次 回（第4回）：10月18日（火）13:30～@本庁舎2階21会議室

次々回（第5回）：11月16日（水）13:30～@本庁舎2階21会議室